様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１１４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０２４７５

研究課題名（和文）幼児期の認知発達にふさわしい教育とは：子どもが「遊び」の中で学んでいること

研究課題名（英文）Education appropriate for early childhood cognitive development: What children learn through "play"

研究代表者
山名　裕子（YAMANA, Yuko）

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：１０３９９１３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では，乳幼児期にふさわしい「学び」について考察することを目的とした。子どもの観察，保育者や教師とカンファレンスを重ねることによって，「自発的な活動としての遊び」が，結果として「学びの基盤」となること，その際，分かりやすく説明しやすい「活動」としてではなく，子どもの思いを丁寧に受け止めることが，何よりも重要であることが明らかになった。一方でそのような姿を捉える視点が教師・保育者間でも違うため，同じ状況を一緒に見たり，具体的な子どもの姿から語ることが，より重要であることも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　幼児期特有の整理のつかない学びが，子どもの自発的活動としての遊びの中で育まれていること，またその遊びを保育者が意図して環境としてしみこませることが重要であることを示唆した。
　特に幼児期から児童期にかけての環境移行では小学校の準備教育として幼児教育が考えられることが多いが，そうではなく，幼児期で十分に遊ぶことの必要性を子どもの姿や保育者へのインタビューから多面的に論じた。この点は，現在議論されている「架け橋プログラム」の構築にも生かされる点である。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study was to consider "learning" appropriate for early childhood. Through observations of children and repeated conferences with teachers, it became clear that "play as a spontaneous activity" becomes the "foundation of learning" as a result, and that it is more important than anything else to carefully accept the child's thoughts, rather than as an " activity" that is easy to understand and explain. On the other hand, since teachers have different perspectives on such situations, it is also more important to look at the same situation together and to talk about it from the perspective of a specific child.

研究分野：幼児教育，発達心理学

キーワード：遊びの中の学び　学びの基盤　認知発達　幼児期から児童期にかけての移行

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）幼児教育・保育の学術的背景：「学びの芽生え」から「自覚的な学び」への「円滑な移行」とは

図 1 は，文部科学省が平成 22 年に報告した「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」から抜粋したものである。幼児期の「学びの芽生え」から児童期の「自覚的な学び」への円滑な移行が，学びを考える上で重要であることを示している。しかしその円滑さをどのように考えるのかによって，教育内容や方法が変わる。移行は必ずしも一方向ではなく，行きつ戻りつ獲得される。その様相を一人ひとりの学びから考え，円滑さを詳細に検討する必要がある。

図1　文科省（2002）での「移行」のとらえ方
円滑な移行ができるように「人とのかかわり」「ものとのかかわり」に関する取り組みが必要と記述されている。

また幼稚園教育要領，保育所保育指針，認定こども園教育・保育要領が，初めて一斉に改訂（改定），施行される。これらの指導要領等では，初めて共通概念として「資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明示された。幼児期だけではなく，すべての年代の子どもたちに共通の姿とも読み取れる。また他の校種との違いとして「〇〇の基礎」という表現が用いられているが，抽象的な表現で表されている子どもの具体的な姿を丁寧に読み取ることにより，この基礎をどのように捉えるのかという点を考える必要がある。

（２）　認知発達の学術的背景：幼児期の認知発達にふさわしい教育とは

申請者は，量的データだけでは見えてこなかった子どもの思考の様相，逆に質的データだけでもみることができない一般的特徴として子どもの姿の往還を大切に行い，深みがあり，かつ説得的なデータを収集し分析することを目指す。子どもの「主体的な活動としての遊び」の結果として現される「学びの基盤」を，認知発達の視点から捉えていく。

認知発達の研究では，「ものとのかかわり」に焦点があてられることが多い。しかし実際の子どもの遊びをみていると，当然「人とのかかわり」の中での学びも多く見られる。そこでこの「かかわり」と認知発達，さらには幼児教育を関連づけて，学びの変容を明らかにする必要があると考えた。最近では「非認知（Heckman, J. J., 2013）」が重視されているが，ここでいうところの「非認知」とは，「肉体的・精神的健康や，根気強さ，注意深さ，意欲，自信といった社会的情動的性質」を指す。認知発達と非認知の発達は，相反するものではないはずであり，この二つの関連性も考えて，幼児教育における学びとは，ということを考える。

２．研究の目的

本研究では，乳幼児教育・保育の独自性である，主体的な活動としての遊びを通して，何が育っているのか，何を育てることができるのかを明らかにする。乳幼児期の「資質・能力」は子どもの主体性を重視すること，子どもと大人とのかかわり，子ども同士のかかわりを大切にすることが重要である。そのような視点から「学びの基盤」を明らかにすることが本研究の目的である。さらに「学びの基盤」を，(1)子どもの発達理解，(2)直観的思考と論理的思考の関連から整理し，特に乳幼児期や児童期の子どもにとって必要な「資質・能力」の捉え方，援助・教育のあり方を検討する。

（1）「学びの基盤」を明らかにすること

活動レベルの検討ではなく，その行為の意味を丁寧に記述することで，乳幼児期の「学びの基盤」を明らかにする。その記述は，量的な記述だけではなく，観察記録に基づいた質的な記述も合わせて行うことにより，子どもの姿をより丁寧に深く考察する。特に観察については一人ひとりの思考の様子がわかるような事例分析，およびインタビューを行い，一見，目に見えない大人の学びとは違う子ども独自の倫理性のある学びを捉えていく。

（2）学びの変容過程を明らかにすること

一人ひとりの子どもの思考を遊びや授業の中で表れる子どもの表現（ことばも含めて）から考えることによって，子どもにとっての学びの過程を明らかにする。思考が変容すると思われるときは，特にその時の状況や文脈を丁寧に捉えることが必要となる。その際，子どもだけではなく，そこに関わっている保育者や教師からも話を聞くことも必要になってくる。インタビューを通して子どもの思考を捉える際に必要な視点も明らかにしていく。

（3）その時期にふさわしい子ども理解・発達理解を中心とした教育を提案すること

具体的な体験，直観的な理解・思考を基盤とした学びから，抽象的な理解，論理的な思考が，行きつ戻りつしながら精緻化されていく発達過程を重視した教育・保育を提案する。特に，本研究では，乳幼児期から児童期前半の移行期を中心に行うため，「学びの芽生え」と「自覚的な学び」を中心に考えるが，その先にある「より専門的な学び」をも範疇にいれた「学びの基盤」を支えるモデルを構築する。

３．研究の方法

基本的には子どもの遊びを中心に参与観察をすること，小学校での授業等の記録を撮ること，そして対象者にインタビューを実施することであったが，コロナ禍により活動が数年，制限されてしまい，質問紙法も追加で実施した。

（1）「学びの基盤」や変容を明らかにするための方法

① 子どもの参与観察

遊んでいる状況や文脈も含めて観察し，質的な分析を行うことにより，子どもの姿をより丁寧に深く考察する。小学生については授業等の状況を観察する。特に一人ひとりの思考の様子がわかるような事例を蓄積した。

② 保育者・教師へのインタビュー

①の子どもの様子を保育者と共有するためにインタビューを行い，かかわりの中でも捉え方や認知発達と保育の関係などを含めて考察した。

（2）その時期にふさわしい子ども理解や発達理解を明らかにするための方法

① 保育者・教師のカンファレンスの記録

様々な研究会や研究会において，校種の違う先生方のカンファレンスを記録し，それぞれの発達観や教育観を明らかにした。

② 保護者への質問紙調査

保護者への質問紙調査を実施し，特に幼児期から児童期にかけての子どもの変容を保護者がどのように捉えているのかを明らかにした。

４．研究成果

（１）幼児期特有の整理のつかない学び

① かかわりの複雑さと認知の関連

子どもが好きな遊びをしているときにエピソードが蓄積されてきている。子どもが主体的に遊んでいるというとき，保育者はどのような子どもの姿をみているのか，また子ども同士のかかわりをどのように捉えているのかという点で，数年分の記録を分類している。

特に，子どもが一人でいるときに表している姿と，一緒に遊ぶ友達によって表している姿が違っていたり，保育者のかかわりによっても子どもの姿は変容する。当然のことではあるが，観察の記録からそのことをさらに分析を進めていく。

② 保育者の意図とは違う子どもの学び

自発的な活動としての遊びであっても，幼稚園での遊びには保育者の意図が含まれている。特に環境構成としてしみこませた保育者の意図が，子どもの遊びにどのように影響するのか，子どもの姿をもとに保育者へのインタビューを行った。その結果，保育者自身があまり意図をもたずに環境を構成している場合や意図を強く出しすぎた場合に，保育者自身が「遊びが広がらない，深まらない」と思っている傾向があること，環境構成を考えるうえで，子ども一人ひとりの援助を考えなければいけないことをどのように意識しているかによっても遊びが変わることなどが明らかになった。

（２）子どもにかかわる大人の発達理解

① 移行期における子どもと保護者の不安

保育形態の異なる２園で卒園式前後と入園式前後の子どもの家での発話を保護者に記入してもらい，子どもが小学校入学をどのように捉えているのか，またその姿を保護者がどのように受け止めているのかという分析を行った。その結果，２園どちらの調査からも，子どもが小学生になることや勉強ができる楽しみという風に，環境移行を比較的ポジティブに捉えているのに対し，保護者の方は友達ができるかどうか，勉強についていけるかどうかという側面が強く表れていた。

② 保育者・教師の子ども観や教育観の違い

子どもの遊びを基にカンファレンスを実施したり，幼児や児童の様子をそれぞれ小学校教師と保育者と見ながら，子ども観や教育観を分析した。保育者は，一人ひとりを捉えることが多いが，教師は集団として見てしまいがちになること，また子どもの姿を性格と捉えがちであることなどが明らかになった。特に環境移行期の子どもの戸惑いを，どのように受け止めるかによって小学校での生活への適応や教師との信頼関係に影響することが示唆された。

（３）今後の課題

① 環境移行期における子どもの思考の変容をさらに捉える

コロナ禍により活動が制限されたことも大きいが，幼児期から児童期にかけての子どもの様子を十分に捉えることができなかった。それでも少しずつ観察事例を蓄積しているので，今後は論文として投稿していく。

② 「学びの基盤」を支えるモデルの構築

当初の計画では，具体的な体験，直観的な理解・思考を基盤とした学びから，抽象的な理解，論理的な思考が，行きつ戻りつしながら精緻化されていく発達過程を重視した教育・保育を提案する予定だった。特に「学びの芽生え」と「自覚的な学び」先にある「より専門的な学

び」をも範疇にいれた「学びの基盤」を支えるモデルの構築を考えていた。しかし，小学校以降の子どもに対しての調査が十分ではなくモデル構築までには至らなかった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 山名裕子	４．巻 14
２．論文標題 就学前教育と小学校教育の円滑な接続～「体験・経験」のつながり	５．発行年 2022年
３．雑誌名 秋田乳幼児保育研究会報	６．最初と最後の頁 25-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山名裕子	４．巻 13
２．論文標題 幼児期に必要な経験と発達の理解～幼児期に育みたい「学び」の過程～	５．発行年 2021年
３．雑誌名 秋田乳幼児保育研究会報	６．最初と最後の頁 26-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山名裕子	４．巻 12
２．論文標題 保育の中での発達理解	５．発行年 2020年
３．雑誌名 秋田乳幼児保育研究会報	６．最初と最後の頁 1，8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山名裕子	４．巻 2018年秋号
２．論文標題 幼児教育から小学校につながる「見方・考え方」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 小学算数通信coMpass	６．最初と最後の頁 7-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山名裕子	4．巻 H30年度
2．論文標題 子どもにとっての具体的操作の意味～生活の中での経験と数学的価値のつながり～	5．発行年 2018年
3．雑誌名 秋田大学教育文化学部附属小学校平成30年度研究紀要	6．最初と最後の頁 60-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山名裕子	4．巻 45集
2．論文標題 発達過程の理解と学習の系統性～一人一人の「教育的ニーズ」と授業	5．発行年 2019年
3．雑誌名 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校研究紀要	6．最初と最後の頁 32-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 山名裕子
2．発表標題 小学生になるってことは？～「幼保小の架け橋プログラム」を丁寧に考える～
3．学会等名 心理科学研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 Sakakibara, T., Yamana, Y., Wada. M., Huang, WC., & Takagi, K.
2．発表標題 Preschool teachers' support for children in a multicultural context: Case study of Taiwanese preschools with Japanese Children.
3．学会等名 19th European Conference on Developmental Psychology（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Yamana,Y., & Nakagaki, A.
２．発表標題 Discrepancy between performances and understanding of distribution tasks in young children.
３．学会等名 Developmental Psychology Section Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 心理科学研究会(編)	４．発行年 2019年
２．出版社 有斐閣	５．総ページ数 303
３．書名 新・育ちあう乳幼児心理学―保育実践とともに未来へ―	

１．著者名 杉村伸一郎・山名裕子（編）	４．発行年 2019年
２．出版社 中央法規	５．総ページ数 183
３．書名 保育の心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

保育者を対象にして年に6回程度開催している「秋田乳幼児保育研究会」の内容や寄稿を編集し，「秋田乳幼児保育研究会会報」として年に1冊，発行している。この会報は広く研究成果を発信するため県内の就学前施設等に送付している。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関